

顕現後第一主日

「わたしはぶどうの木」

イザヤ書5章1―2節

ヨハネ福音書15章1―17節

(1)

ヨハネ福音書には、主イエスが「エゴウ エイミー」といわれた箇所が七か所あります。

- ・わたしは命のパンです。
- ・わたしは世の光です。
- ・わたしは羊の門です。
- ・わたしはよい羊飼いです。
- ・わたしはよみがえりであり、命です。
- ・わたしは道であり真理であり命です。
- ・そして「わたしはまことのブドウの木です」の七カ所です。

「ブドウの木」のたとえは、ほとんどなく牧歌的なイメージがあるかもしれませんが、しかし、ヨハネ15章の後半は、主イエスが十字架に向かう直前に語られた箇所です。

それにしても、どいつて、主イエスは数ある木の中で、あえて「ブドウの木」をお選びになったのでしょうか。

日本本土の代表的な木といえば「桜」です。沖繩の代表的な木は、「琉球松」です。沖繩的那覇あたりに見るヤシの木街道は観光用に植えられたものです。

パレスチナ地方の代表的な木といえば、ヘルモン山のふもとに、威風堂々とそびえ立つ「シバノンの杉」でありまじょう。「シバノンの杉」は、香りが良いので神殿の内張りに

使われております。シバノンの杉は、その枝を四方に広げて、そこから得られた栄養分のすべてを、幹を太らせるために奉仕させているように見えます。

ところが、ブドウの樹ですが、シバノンの杉のイメージとはまるで違います。その幹に目をやる者は、あまりにか細い一本の幹が、身をくねらせながら、棚いっぱい広がる枝を支えながら、枝の先にある多くの房を懸命に支えている姿が目に入ってきます。

主イエスの生涯をイメージする木を選ぶとすれば、やはりシバノンの杉ではありません。

すべてを与えた末、死のほかなにもむくいられなかった主イエスの生涯にふさわしい木とすれば、やはり、「ブドウの木」ではないでしょうか。

(2)

ところが、パレスチナの「ブドウ畑」は、何世代にもわたり先祖から受け継がれてきた大切な財産・嗣業でありました。

列王記上21章には、「アハブ」という王ともあろうお方が、隣りの住人ナボテのブドウ畑があまりに立派であるのを見て、欲しくなり、あらゆる手段を穷して、手に入れようとなりました。しかし、ナボテは断固として断ります。それでも、アハブ王はあきらめず、自分のブドウ畑と交換して欲しいと言い寄るのです。しかし、ナボテはなおも、「わたしは先祖の嗣業をあなたに

譲ることを断じていたしません」と断ります。すると、アハブ王は、ナボテを石で打ち殺し、ブドウ畑を手に入れたのです。それほど、「良いブドウ畑」は手に入れたいものでした。

山梨県の勝沼一帯は、ブドウの産地です。ブドウの棚が山裾まで伸びている光景が目に入ってきます。棚いっばいに広がった「枝」、その先に見えるゆたかな「房」を目にしますが、ひとつたび、根元に目をやれば、どこか黒ずんで、やせ細って見えるブドウの木が、身を捻る(ねじる)ようにして、棚いっばいに広げた枝と、その先にある房とを懸命に支えている光景が目に入ってくるのです。

(3)

主イエスは、「わたしはぶどうの木、あなたがたは「その枝」と言われましたが、「枝」に求められてくるように、ただ、「ぶどう」に「つゆ」が

15章1節から17節の箇所を読み直す時、「この箇所のキー・ワードといえは、明らかに「ぶどう」です。「ぶどう」・「結び」・「つゆ」・「つゆ」が11回も繰り返されています。「ぶどう」・「つゆ」を福音書で強調したヨハネですが、彼の三つの書簡でも同じように、「愛するわが子よ、つゆとつゆならぬ」と強調しています。しかし、自らを顧みる時、つゆない、つゆみのなき、つゆながら続けなさいと言われなくても、いつみても不徹底なクリスチャンであることに嫌気がたいて、自分自身「見切」をうけたくなる

かもしれない。こころの思いは多くの信仰者が一度ならず、いえ、たびたび経験してきたことです。しかし、たとえ、不徹底な自分を嘆き悲しむことがあったとしても・・・です、やはり「とどまり続ける」・「つながら続ける」ことは大切です。自分で自分に見切りをつけてはなりません。

「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で、神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じらるなら、あなたは救われた」

(ローマ書10:9) 救われている事実まで疑ってはならないのです。

(4)

「ブドウ畑」は、しばしば、イスラエルの民にたとえられてきました。イザヤ書5章1節から2節にそれを見ます。「わたしはわが愛する者のために、そのぶどう畑についてのわが愛の歌をつたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上、一つのぶどう畑を持つていた。彼はそれを掘りおこし、石を除き、それ「良いぶどう」を植え、その中に物見やへらるを建て、またその中に酒ぶねを掘り、良いぶどうの結びのを待ち望んだ」。

農夫なるお方、主が「ブドウの畑地を掘りおこし」・「石を除き」・「ブドウの樹を植え」・「物見やへらるを建て」・「酒ぶねを掘り」・「いいしまで至れらる」・「ブドウ畑を手入れしておられるのか」という様子が伺えます。

「ブドウ畑」は、また、「キリストの教会」にたとえられます。「ブドウ園

とうとうタイトルの「月報」がであります。
ブドウ園のように、四方に枝葉を広げて、実り豊かな教会でありたい、と願うタイトルを「ブドウ園」としたのでしよう。

昨年の日本列島は、悪性コロナを恐れて、多くの人が先々に不安をいただきました。しかし、たゞえ……、つづ、「大空が巻き去られ、地が崩れ去る」などという、とんでもない天変地異が身辺に起こるうとも、私たちが、「わたしはまことのブドウの木」と仰せになられたお方に「とびまゐる」「とびまゐり続ける」ことが如何に大切であるかを忘れてはなりません。

「とびまゐり続ける」「なむ、ひびく」「ではありませんが、しかし、つづ、必ず、身の回りが豊かになることを多くの者たちが経験してきました。

顧みて、ブドウの木であるキリストに結びついていない時は、どんな実を結んでいったのでしょうか。

「そのころは、それらの罪の中であつて、この世の流れに従ひ、不従順な子らの中であつて、自分の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けねべき子らでした。しかし、罪過の中に死んでいたわたしたちを、キリストとともに生かして、……、あなたに救われたのは、ただ、恵みにあふれています(H.スピンナー：115)もうおわかりでしょうか。

豊かな実を結ぶことを願う者に難しうことはあります。」「枝むいてつづなむかぬ」「とびまゐる」「とびまゐる」

ける」「……」全てではありません。
とびまゐり続けるなら、ぶどう畑の主人さまが、日々、手入れをしてくださる、虫が付けばそれを取り除いてくださる。枝振りが悪ければ剪定(せんてい)していただく。アッ!と自分で面倒を見る必要があります。ぶどう園の主人さまが、いつさいの面倒を見てくださるのです。

(5)

「とびまゐる」とは、厳密に言えば、「キリスト・イエスの中に」ということになります。

使徒パウロの手紙に、この「ヒントウ・クリストウ」をたびたび目にします。「もはや、わたしが生きているのではなへ、キリストがわたしのなかにあって生きておられます」「ガテヤ2:22」これはパウロの信仰告白です。

ある西欧の有名な神学者は、「クリスチャンとは、15分」1度位、せめて、『主よ』という思いを全うする。……、そうした思いが息づいてくるなら、それがクリスチャンとしての確かなものであると気づくのはなほ早いででしょうか「とびまゐる」。

朝起きてから、……、つづも、頭の大半を占めていることは、「仕事」のことであり、「何を食べるか、何を着るか」であり、「わが子」のことであるかもしれない。

15分「1度は無理としても、せめて、一日「1度はなほ、回響(こたへ)していただくかもしねませぬ。一日「1度でも

いらのです。せめて、一日に一回は聖書を開く。パロパロでもよい。とにかく聖書を開く、その癖を付けよ。多くをもとめさせよ。せめて一日、五分で十分なのです。一人神の御前に静まり祈る、食前の祈りだけでよいことはならないのです。

周東のそみキリスト教会のみなさんが、せめて一日、五分でも、神の御前にひざまずいて祈るならば、この教会に、リバイバルが起きると信じています。くむらようですが、せめて、一日一回は聖書を開き、一日の分は主の御前に祈ることを身に付けたいただきたいのです。一日を終えるにあたって、ヤシヤシと不平とつぶやきだけの毎日で終わってはならないのです。

くじした習慣が身に付けば、次第に、身辺に「豊かな実」を結びはじめます。それは、わたしのうちこいます聖霊の働きます。

ガラテヤ書5章22節では、御霊の結ぶ実は、「愛・喜び・平和・寛容・慈愛・善意・忠実・柔和・自制」とあります。それに反して、以前、わたしたちの結んでいたのは「不品行・汚れ・好色・偶像礼拝・まじない・敵意・争い・そねみ・泥酔・宴楽・およびそのたぐい」という野ブドウの実ではなかったでしようか。

キリストを信じる者が、生涯豊かになることが願われて、あらかじめ用意されていくのが、「聖餐式」ではないでしようか。

聖餐式において、「パン」と「ブドウ酒」の二品をただくという「聖餐」

尻込みすることがあったかもしれませぬ。それでも、食卓から落ちるパンくずのひとかけらをいただくにふさわしからぬ者であることを覚えながら、深く心に留めて、二品をいただいてきました。

「わたしの肉を食べ、わたしの血をのむものは、わたしにとどまり、わたしもまた、その人にとどまります」(ヨハネ福音書6:56)―、この御言を宗教改革者たちの多くが、聖餐と結び付けて解釈してきました。礼拝において御言葉を聴き、共に聖餐にあずかり共にキリストの中にとどまり続けてきたことが、わたしたちを今日にまで至らしめたのではないでしようか。

へブル人の手紙10章25節に、「ある人たちがいつもしているように、集会をやめることをしないで、互いに励まし、かの日が近づいているのを見えますます、そうしようではないか」との勧めがなされています。何故、わざわざ、そのような勧めがなされているのかといえば、集会をやめれば、キリストにとどまらなくなることではないでしようか。

ブドウの木にとどまらない枝は、枯れて、外に投げ捨てられ、人々はそれを集めて、火に投げ入れて、燃やされて無用な枝となります。

主イエスは、「わたしからはなれては、あなたがたは何一つできません」と言い切りました。しかし、果たして私たちは、これを「アーメン」と受け止めているでしょうか。それとも、「何一つできません」とは、とんでもないこと

り続ける「ものなをいじめんくだわら
ますようじ」。キリスト・イエスの名に
より祈ります。「アーメン」。

受け止めることなのではないか。
キリストと結びつき、しながっていな
ければ何もできなからい井で言われて
いる、わたしたちがいつまで致命的なこ
とをいえば、それは、「互いに愛しあ
う」ということだ。

「わたしがあなたがたを愛したよう
に、あなたがたも互いに愛し合おうと
これがわたしの戒めです」(1-2)と
あります。

実際、わたしたちは、キリストから
離れて互いに愛し合おうとすることが
なると、もし思いつくなら、それは
夢や幻想にすぎません。

「互いに愛し合えます」と言える人
は、自らの罪深さが十分分かっていな
いのではないでしょうが。

「キリストはブドウの木」であり、「わ
たしはその枝」である関係を、いま一
度、まじめに見直さねばなりません。
周東のぞみキリスト教会は、この地に
開拓してから50数年を経ています。
こうまで数々の実りの豊かさを与えら
れたのは、日々、ブドウの木の枝とい
てとどまり続けてきたからではない
でしょうか。それはまた、キリストが
枝葉を大きく広げて、この群れに豊か
な命を注いでくれたからであります。

主イエスは、「まいじのブドウの木」
として、今も恵みと愛を注いでおほ
れるお方ではなごうじでしょうか。

【祈ります】

父なる神さま、今年一年、いつかいつ、
キリストに結びつく枝として、何時、
如何なる時も、「よびよす」・「しなが